

【学術論文】

# 喪失を受け継ぎながら *The Inheritance of Loss* におけるポストコロニアリズムの諸相

松田 雅子\*

## Inheriting Loss from the Past Aspects of Postcolonialism in *The Inheritance of Loss*

Masako MATSUDA

### Abstract

Kiran Desai, who was born in 1971 in New Delhi, received the Booker Prize in 2006 as the youngest female writer by *The Inheritance of Loss*. The hardship of Indian people in the post colonial societies of 1980s in North India and in New York are described along with the humiliating recollection of an Indian young man, who later becomes a judge, studying in Cambridge during the World War II. Most characters in the novel experience some kind of loss as they inherit colonial legacy even after the independence of India.

Around 1980s it is widely recognized that bidirectional viewpoints from both former colonies and imperial countries are necessary to understand the present world of post colonialism because they are closely related and affecting each other. This novel reveals such complexities in different levels of society. Storytelling by the Indian heroine, Sai, reflects her position in India as one of its elite members, showing some characteristics of complicit postcolonialism. However, the community of the elite Indians collapses and loses its power at the end, therefore, it is concluded that the novel shows oppositional postcolonialism at the same time. In addition, polyphonic voices of characters in the three plots makes it possible to reveal complexity of postcolonial society in India.

Key words : Postcolonialism, oppositional postcolonialism, complicit postcolonialism, mimicry, subaltern

### 1. はじめに

ニューデリー生まれの女性作家キラン・デサイ (Kiran Desai) は *The Inheritance of Loss*<sup>1</sup> によって、女性作家として最年少の 35 才という若さで、2006 年のブッカー賞を受賞した。作品の題名『喪失の継承』の名のとおり、インドにおけるイギリスの植民地支配という喪失の「負の遺産」が、独立後もインドの人々にどのような影響を与えているかを探究し

た作品である。小説の背景となる場所を、インド北部・カリンボン、イギリス・ケンブリッジ、アメリカ・ニューヨークの 3 か所に設定し、インド独立後の村における生活、第 2 次大戦中イギリスでのインド留学生の異文化体験、および戦後覇権国家となったアメリカに移民として不法滞在するインド人労働者の暮らしが描かれる。第 2 次大戦後は第 3 世界から先進国への移民によって世界の経済システムが成り立ち、周辺と中心との関係が、植民地から宗主国へと場所を移動して、幾重にも創り出されている 1986 年前後の状況に焦点を当て、やがて 90 年代のグローバリゼーションへと移行していく時代の様相

\*長崎大学水産・環境科学総合研究科

受領年月日 2010 年 11 月 8 日

受理年月日 2011 年 5 月 30 日

が描かれている。

1980年代以降、歴史学においては、単独のイギリス史ではなく、複数の国々を扱ったイギリス帝国史研究が盛んになった。その転換をもたらした最大の要因として、カルチュラル・スタディーズの影響によって、他者認識やオリエンタリズムなど、文化・思想面についての分析が活発に行われるようになったことがあげられる。その結果、植民地と本国の関係も、一方的な支配従属の関係というより、相互に影響し合う関係としてとらえるべきだとされ、「中核と周辺双方からの複眼的な視点」が求められるようになった。それはまた、西洋世界と非西洋世界の「遭遇」のありかたこそが問題なのだという認識をもたらした。<sup>2</sup> この作品は、そういった旧植民地に関する問題意識を文学において具象化した小説であるということが出来る。

この小説の3つの異なる場所での出来事をつなげていく中心的な事件は、1986年インド北部でのネパール系インド人によるゴルカ民族解放戦線の独立運動である。デサイは1999年に13年前のできごとを振り返って書き始め、執筆には7年以上を費やし2006年に作品が出版された。<sup>3</sup> ところが、執筆中に2001年のニューヨークで9・11アメリカ同時多発テロが起こったのである。この小説にはテロについての言及はもちろんないが、ニューヨークの底辺で働く第3世界の移民の人々の追い詰められた困難な生活が、克明に描写されている。いわゆる世界の中核都市におけるポストコロニアル体験である。このような点が評価され、出版直後の『ニューヨーク・タイムズ』の書評では、「作品の時代背景は1980年の中頃に設定されているが、9・11後の最上の種類の小説であるように思われる」ときわめて好意的な評価を得ている。<sup>4</sup>

しかし、一方で、カリンボン出身でシッキムの大学研究員であるカワス (Khawas) は、作品におけるネパール系の人々について、あるいはゴルカ民族解放戦線について、作者の理解と共感が充分ではないとの批判を寄せている。<sup>5</sup> この小説での3つの場所において、旧宗主国であったイギリス（あるいはアメリカ）と植民地であったインドの民衆レベルでのせめぎあいが描かれるのだが、カリンボンのプロットにおいては、インド人の中に2つの勢力の対立が見られることが、評価が分かれる原因だろう。インド人の中の対立とは、親英的なエリートのインド人と、ネパール系インド人を含むインド的なインド人の階級的分断である。エリート的なインド人に焦点を絞

れば、欧米読者の共感を得る、いわゆる「共犯的ポストコロニアリズム」が生まれ、インド的なインド人を前景化すれば、「対抗的ポストコロニアリズム」<sup>6</sup>になる可能性が生じる。

インド系作家が英語で小説を書くとき、1950年代まではほとんどが海外の読者を想定していた。当時のインドの識字率はわずか10パーセント台にすぎなかったからである。<sup>7</sup> 2001年になると識字率は64.8パーセントまで上昇するが、いまだに「英語文学の主たる読者をインドの大衆であると考えられない状況」にある。<sup>8</sup> しかし英語文学は、インド国内には英語使用者人口が少ないにもかかわらず、海外の読者を対象にその出版量は多く、大きな存在感を持っている。<sup>9</sup> そういう状況の中で、9・11後のポストコロニアル文学として、この作品は欧米の読者にどのような点がアピールしているのだろうか。

小論では、上記のような問題設定のもとに、作品におけるポストコロニアリズムには、どのような特徴が見られるのか具体的に検討する。その際に、ポストコロニアリズムあるいはポストモダンの理論家たち、ホミ・バーバ (Homi Bahba) の「擬態」(ミミクリー)、ガヤトリ・スピヴァック (Gayatri Spivak) の「サバルタンは語る事ができるか」、さらにリオタール (Jean-Francois Lyotard) とトリン・ミンハ (Trinh Minh-ha) の「科学の知」と「物語の知」<sup>10</sup>、さらにミシュラとホッジ (Mishra and Hodge) の「共犯的ポストコロニアリズム」と「対抗的ポストコロニアリズム」を区別するという4つの視点を手がかりに考察を進める。

## 2. ポストコロニアリズムについての論点

ヨーロッパによる非ヨーロッパの植民地化は1930年代までに、地球上の84.6%を占めるほどになった。これらの植民地は第2次大戦後、ほとんどが独立を果たしていくが、その負の遺産は形を変えて残り続けているので、植民地化と同時に、大規模な脱植民地化の歴史を視野に入れなければ、いま私たちが生きている世界の特徴をとらえることは不可能だろう。<sup>11</sup> そして、過去の植民地体験が現代のさまざまな民族の生活や認識の枠組に及ぼした影響を表現する最も重要な方法の一つとして、*The Empire Writes Back* を著したアッシュクロフト (Ashcroft) は文化的表現をあげ、そのなかでも文学の役割を重視している。<sup>12</sup> 2001年のニューヨーク同時多発テロはポストコロニアリズム理解の重要性を象徴するできごとであったが、それ以後、旧植民地の人々の現

実を理解するために、ポストコロニアル文学への関心が急速に高まり、その要請に応える作品が待たれていたといえるだろう。

この小説はそのような作品のひとつであり、そのために好評を博したといえるが、欧米人読者にどのような点がアピールしているのだろうか。それについて、次の5点を考えてみた。

(1) 判事(主人公サイ[Sai]の祖父)の喪失の体験—イギリスに協力してきたインド人エリート階級の内面の喪失の物語は、植民地主義に対し多少とも罪悪感を抱いている欧米の読者にとって、共感することができる想定内の物語である。マコーリー(Macaulay)のいう<sup>13</sup>、イギリス人とインド人の仲立ちをする通訳としてのインド人エリートの観察から、バーバは擬態という概念を唱えた。判事の回想はそういった、板ばさみになったインド人の栄光と悲慘を鮮やかに表現している。

(2) カリンポンの自然やヒマラヤ・ネパールに近い秘境の描写—世界を探検し、西洋の知によってその謎を解明する『ナショナル・ジオグラフィック』的な視点がある。作品全体に、異なる場所についての観光的な関心が見られ、読者のエキゾチシズムや旅心を駆り立てる。

(3) イギリス的インド人の視点からの社会描写—サイが暮らすインド社会でのイギリス式生活様式とキリスト教の修道院の生活などは欧米人の読者にとってなじみがあり、インドの村の生活様式という異文化への導入、あるいは理解のための視点として適切である。

(4) ニューヨークの移民社会の現状—リアルタイムのポストコロニアルな情勢を体験的に知り、経済的、文化的疎外に悩む移民の困難な状況に共感を感じることができる。

(5) インド人エリート女性であるサイには、将来欧米世界に移動することで活躍できる場が開けている。これまで虐げられてきたインド女性に、現代では大きな活躍の可能性があることを示唆するのは、読者に贖罪的な安堵感をもたらす。

一方、問題点としては、

- (1) インド的な女性の声聞こえてこない
- (2) ネパール系インド人というマイノリティに対する共感が薄い
- (3) サイはインド的なインド人とほとんど接触がないので、客観的な視点人物として適当なのか

があげられる。ここでいうインド的な女性とは抑圧

された女性たちと、インド文化を伝える女性たちである。前者の例として、焼身自殺を遂げた判事の妻ニミ(Nimi)と、夫が警察から虐待を受け、判事に援助を求めるが断られたので、彼の愛犬を盗んでいく女が考えられるが、彼女たちの語りは語られることがない。したがって、そのような抑圧された存在があるということは示されているが、彼らが主体として語る物語はなく、彼らの声は歴史の闇のなかに消えていく。これは、サティ(夫の死後に行われる妻の殉死)を行う女性の声は、彼女が死んでしまうので聞くことができないという、スピヴァックのサバルタン(従属的存在、あるいは下層の人々)はその主張を語るができないという主張に合致しているといえる。

また、インド的な女性がインドの文化的伝統を語る語りがないので、西洋の「科学の知」に対抗する「物語の知」がアピールされないという問題がある。西洋の「科学の知」は、秘境の地にも押し寄せ、判事が秘蔵している『ナショナル・ジオグラフィック』、あるいはローラ(Lora)の娘ビヤリー・バネジルがレポーターとして働くBBC、ミセス・センの娘ムンムンの就職が決まったCNNなど(66)、出版やメディアの普及という形をとって、波及している。さらに、サイの父は宇宙飛行士として、ソ連とインドが共同でおこなった最先端の科学技術を駆使する、宇宙旅行計画に参加しようとして挫折する。しかし、それらの「科学の知」に対抗するネイティブの知、すなわち「物語の知」が語られないのである。

科学的な知の様式の代替物として、リオタールは物語を強調し、「能力」と「日常的知識」のうち前者を特権化する現代の科学観においては、どのような意味がもたらされるかについて考察している。科学は西洋においては「真理とは何かを決定する権利」を行使する主要な手段になっているが、物語はそれが支配する口承的な社会においては、知識を得る手段として、現実の社会の産物として正当化されていた。<sup>14</sup>

さらに、サイの女性の親族が生き延びていないという設定は、小説の視点として重要な欠落=喪失であり、祖母、母親、娘と受け継がれていくインド文化の生活的伝統が欠けている。これは「科学の知」に対抗する「物語の知」が力を持っていないことを意味する。ビジュの祖母と母親も早く亡くなり、彼も父親に育てられているので、子どもを養育するインド女性が登場しない。サイはキリスト教の修道院で育てられ、祖父と暮らすようになってからは、イ

ギリス化したインド女性のローラとノニ (Nomi) が母親代わりの役を務めている。彼らは下着でさえも、マークス・アンド・スペンサーのデパートで購入するというイギリスびいきである。サイは料理人以外にインド的インド人と触れ合うことは全くなく、ギャンが初めて出会った同年代のインド人である。したがって、土着のインド人の視点が充分反映されていないといえる。

一方、カリンボンに住む主要人物たちの最大の娯楽は読書で、図書館は生活の中で重要な役割を果たしている。彼らはイギリス文学について、あるいはポストコロニアル文学について語りあう。ローラ、ノニなどインド人と、スイス人のプーティ神父は、イギリス人作家がイギリスについて書いたものはすばらしいが、インドについて書いたものは真実とはかけ離れているので、読むと体の具合が悪くなるという。(198) これはポストコロニアル文学では、現地のインド人の視点を重視すべきであるという主張で、この作品についての作者のメタ批評的視点が導入されている。

ローラとノニはポストコロニアル文学の先駆者、ナイポール (Naipaul) について論じている。ノニはナイポールの『深い河』を、これまでに読んだ作品の中で最高の1冊であるという。(46) 一方、ローラは、ナイポールは過去にばかりこだわって進歩していない、植民地時代の感性から自らを解放しようとしていないと批判し、今では「完全に国際社会になった新しいイギリス」のことを書くべきであると親英的な意見を述べる。イギリスの人気の食べ物、フィッシュ・アンド・チップスから、インドのチキン・ティックカ・マサーラになったほど時代は変わったという。ノニも、ナイポールはどうして彼自身が今住んでいる場所のことを、たとえばマンチェスターの暴動を書かないのかと疑問を呈する。このような意見は、ポストコロニアル文学についての作者自身の見解を反映し、インド人がインドの現代的な問題について書くことの重要性が強調されている。

### 3. 作品の構成

この作品の主要な人物たちは、イギリス化されたエリートのインド人たちと、インド社会の底辺の人々、およびマイノリティであるネパール系インド人の3つのグループに分かれる。ヒロインである17歳のサイは、イギリス化されたインド人で、結末ではインドを離れる決意をするので、15歳でインドからイギリスさらにはアメリカへ移住した作家自身の

経歴が色濃く投影されている。<sup>15</sup>

小説は53章から成り立ち、かつてあるスコットランド人が自分の夢を実現し、カリンボンに建てた「チョー・オユ」という屋敷に住む3人の住人(祖父と孫娘、その料理人)それぞれについて、3つのプロットが交錯し、モンタージュ手法で切り替わり展開していく。重複も含めて、大体の章の分量は以下のとおりである。

- (1) サイの祖父ジェムンバイ・パテル (Jemunbai Patel—判事) の回想—8章
- (2) 判事の料理人の息子 (Biju) とニューヨークにおける彼の移民生活—16章
- (3) カリンボンにおけるサイとギャン (Gyan) の恋愛、上流階級の人々と外国人、ゴルカ人の反乱—30章

3人の声、3つの場所のポリフォニーによって、インドの村の人々の過去・現在・未来の像が浮かび上がり、それぞれの人物が表徴する階層の価値観が明らかにされる。

判事の回想では、イギリスの植民地政策に加担してきたインド人が直面した人種差別と、それを切り抜けなければならない恥辱と誇りの内面の葛藤が描かれる。この部分はかなり重苦しい雰囲気醸し出す一方で、ニューヨークでのビジュの移民生活は、擬音語や文字表記の視覚的工夫を駆使しながら、悲惨さを笑い飛ばしてしまうような、陽気なトーンで描かれている。これは表層はあくまでも明るい、アメリカ文化を中心としたグローバリゼーションの持つ、カーニバル的な時代の雰囲気の反映でもある。世界の若者をひきつけてやまないお祭り気分のメトロポリスが、カリンボンの静けさと対照的に描かれている。この陽気なトーンはまた、デサイのデビュー作『グアヴァ園は大騒ぎ』(1998)に通じるものがある。また、サイとギャンのプロットは反乱を背景にしたロマンスで、各プロットのトーンにはかなり変化があり、読者を引きつけていく力量が感じられる。そこで、この3つのプロットを(1)判事の回想、(2)ビジュの移民生活、(3)サイとギャンの恋愛という年代順に考察し、(旧)宗主国と(旧)植民地の人々の間で、現在も続く確執とその影響を分析していきたい。

### 4. ケンブリッジにおけるジェムンバイ・パテルのイギリス文化との遭遇—擬態としてのインド人エリートの内面

この作品の大きな特色として、植民地統治に重要

な役割を果たした ICS (Indian Civil Service) という統治する者と、統治される者の間に立つインド人エリート階級の自己形成が描かれる。彼は立身出世を成し遂げるが、過酷な競争、差別、疎外がもたらしたトラウマに苦しみ、人間的な側面を喪失し、鎧をまとったトカゲさながらの老人として、孫娘サイの目に映る。

判事は 1957 年に 38 歳の若さで引退し、カリンボンで隠遁生活を送っている。彼はインド人同胞からは疎外され、イギリス人からは差別を受けつつ利用された。内面のストレスとトラウマのために、妻の虐待にはけ口を求め、家族との交流も絶つ。晩年にはその代償行為としてペットの犬を愛玩し、犬が誘拐されると、喪失のショックに狂ったように感情をほとばしらせる。この部分では、料理人が作り上げた華麗な出世物語という表向きのストーリーで粉飾されていた、判事の過去の真実が顕わにされる。

判事が友人に語る「現在が過去を変える」(208)という言葉は、植民地統治に対する、この作品が発しているメッセージのひとつである。しかし、苦しかった過去を物語として語ることによって、そのトラウマを修復する必要がある。その意味で、判事の語りは、8 章ともっとも短い、通低音として全体に響く重要な部分である。

インドにおけるイギリスの巧みな植民地政策は、「イギリス人と、イギリス人が支配する何百万もの民衆とのあいだの通訳となるべき階級—血と肌の色においてはインド人でありながら、趣味、見解、道徳、そして知性においてはイギリス人であるような階級」を作り出すことであった。<sup>16</sup> こうした階層が、人口 3 億といわれた植民地インドを統治する、わずか 1300 人ほどのイギリス帝国のインド高等文官の仲立ちをしたのである。このようなイギリス化したインド人エリート階級の養成は、インドにイギリス的生活様式を広めることで、イギリス商品の需要を拡大する目的も持っていた。題名となっている「インヘリタンス」という言葉の語源はオックスフォード新英英辞典によると、“being admitted as a heir” (正当な後継者として認められること) となる。イギリスが去った後の「正当な後継者」とは、この「通訳となるべき階級」の人々なのであろうか。

判事ことジェムンバイ・パテル (ジェム) は 1919 年、農民カーストの家庭に生まれる。彼の人生は、次のように回想されている。

1939 年 20 才、ニミと結婚し、1 ヶ月後にケンブ

リッジへ留学する。

- 1942 年 23 才、公開選抜試験 (OCE) に合格、2 年間ケンブリッジで研修を受ける。
- 1944 年 25 才、ボンダへ赴任。しばらくして妻を実家へ帰す。娘(サイの母親)の誕生、ニミの焼身自殺。
- 1947 年 28 才、インド分離独立。
- 1957 年 38 才、チョー・オユへ引退。
- 1977 年 58 才、サイ (8 才) が一緒に住むようになる。
- 1986 年 67 才、2 月、ライフルが盗まれ、その後愛犬マットがいなくなる。

成績優秀なジェムは貧しい一家の希望の星としてミッションスクールで学び、父親は息子を判事にしようとして夢を描く。

結婚後すぐに渡英したジェムの留學生活について、イギリス社会での彼の徹底した疎外的状況が描かれる。22 回下宿探しを断られた挙句に、ようやく見つかった下宿では、夕食でも暖かい料理が出ることは一度もない。誰とも 1 日中話をせず、老人たちからもバスのなかでそばに座るのを嫌がられる。笑うと白い歯が見えて、黒い肌の色が強調されるかもしれないと恐れるあまり、ついに笑い方を忘れる。さらに変な臭いがするのではないかと、体臭についてオプセッションにとりつかれる。

ほとんど狂気に陥ったと思えるほどになってしまったのは、1942 年の公開選抜試験受験前後である。1 日 18 時間の猛勉強で頑張ったが、300 人中 48 番にしか届かず失敗する。しかし、その直後、インド人を多数採用するという新方針が突然発表される。追加合格者リストの最後に自分の名前を見つけた時には、安堵感で 3 日 3 晩泣き続ける。

この試験は第 2 次世界大戦の最中に行われているのだが、ナチのロンドン空襲にはまったく言及がない。その後 2 年間の研修では、ケム川でのパンティング、グランチェスターでのお茶、バッキンガム宮殿での衛兵の見物など、平和な観光客としての典型的なイギリス文化消費の楽しみが描かれていて、戦争の影は不在である。この乖離は作品における時代考証の正確さを測るめやすとして、あるいは作家の歴史的事象についての目配りの客観的公平さの物差しとして、ゴルカ人の反乱を扱う時にも問題になるだろう。

イギリス留學中には、自身に対するいじめに加えて、自分と同じ若いインド人留學生がパブの裏で暴

行と辱めを受けているのを、黙って見過ごしてしまうという事件が起こる。(209) このような幾重にも重なった無力感が、帰国後、妻に対するドメスティックバイオレンスとなっていく。

ジェムは5年後帰国するとき、イギリスから化粧用パウダーを持ち帰ってくる。パウダーはインド人官僚をより白人に近い風貌に見せかけるために、法廷に立つ前に使用されるのである。そして、インド人判事はイギリス人に代わって、同胞でありながら常にインド人に不利な判決を下さなければならないという役目を課せられていた。これは E. M. フォースターの『インドへの道』(1924) の裁判のシーンでも、「有罪の判決は不可避なのだから、インド人に宣告させたほうがいいのだ。そのほうが結局は騒ぎが少ないだろう」<sup>17</sup> というイギリス人官僚ロニーの言葉にも表わされている。カールしたかつらをつけ、パウダーを塗ったインド人裁判官が土地の人々に不利な判決を下すやり方は独立後も続いているので、植民地時代は依然として続いているという作者の説明がある。(205)

女性の化粧道具であるパウダーを使用させられることには、イギリスに協力するインド人男性が、男性としての力を喪失していることを示唆している。その代償作用として、夫婦間のセックスは、夫の怒りや憎しみの解放手段となり、妻を攻撃することによって、傷つけられた自己の回復をめざすという悲惨な企てになり、負の連鎖が続く。

妻に対して残酷に振舞う誘惑に抗えなかった。  
自分が学んだ孤独と恥の感覚を幾度も彼女に教え込んだ。(170) (下線は筆者による)

妻のニミはインド的なライフスタイルから抜け出そうと全く考えないので、ジェムの苛立ちは募り、さらに過激な暴力行為に及ぶようになる。ニミは活発な性格だったが(169)、次第に気が乏しくなり、登場人物としてのリアルさを喪失し、判事の影のような存在、消してしまいたいインド的自我の表象となっていく。インドにいながら、ニミが相談相手も、助けてくれるものもない全く孤立した状態で、一方的な虐待を受けるという境遇は、ジェムの留学体験と対を成し、植民地インドを表象する彼女のイメージを作り上げている。

出産のためにニミが実家へ帰ったあと、判事は妻子と縁を切り、実家とも縁を切る。まもなくニミはストーブの火で焼け死んだという知らせが入る。彼

女の焼死は、未亡人が焼身自殺をする、インドの風習のサティの連想を誘う。

留学から33年後(1977年)、判事の留学時代唯一の友人ボースがチョー・オユヘやって来る。彼はインド人も白人の高等文官と同じ額の年金をもらえるように訴訟を起こしている。インド人官僚は、独立後もイギリスに協力してきたのに、劣等な地位に甘んじなければならぬ不条理が、ここで明らかになる。宗主国の差別的戦略に対し、バーバは「支配文化の自律性」の神話が崩れていくのは、支配文化の虚妄性を直接に弾劾する言葉によってではなく、むしろそれを「真似る・繰り返す」行為が行われながら、しかしけっして完璧に「真似る・繰り返す」ことができないという、時差をもった場所においてだ<sup>18</sup>と主張する。独立後であっても、ボースの要求が通らないのは、帝国文化の虚偽性の表れである。

ボースは、白人がインドから退去したということは評価できるけれども、現在では「彼らはリモートコントロールしている」(206)と、グローバリゼーションを分析し、過去にあった抑圧が変わらずに残っているという。それに対し「現在が過去を変える」

(208)と判事は主張するが、説得力に欠けている。親族とも友人とも一切縁を切る彼は、現在が過去を変えると自信を持っていえるほどの積極的な活動は、何一つ行っていないからである。

しかし、ボースは文化的・普遍的権威としての「イギリスの規範」を揺り動かし、彼に同調しない判事もまた自らの疎外体験の回想を語ることで、イギリスの道徳的権威を揺るがしている。植民地時代にイギリスに協力してきたエリートたちも、支配者が予期しなかった抵抗の姿勢を見せている。

## 5. ニューヨークにおけるビジュのポストコロニアル体験

ビジュのニューヨーク移民生活のプロットでは、現代世界で進行する、移民、移動、消費文化など、アメリカを中心としたグローバリゼーションの様子が描かれている。ビジュはビザとアイデンティティの喪失に悩んだ末、インドへの帰国を決意する。しかし、同じ頃インドにいるサイはイギリス行きを決意する。場所から場所への、文化間の移動が時代の特徴であり、アイデンティティの2重性、すなわちポストコロニアルな主体形成は多くの人々に共通する問題になっている。「心はある場所にありながら、頭では常に別の場所の人々のことを考えている」(311)という状況、「いちどきにただひとつの場所にいる、

ただひとつの存在であることはできない」という自己と場所との有効な同一化の関係性をどのように発展させるかという「場所と転位」の問題を描いているという点で、<sup>19</sup> ポストコロニアル文学の重要な論点が示されている。

ビジュは世界各国の料理を提供する飲食店で、使い捨ての職を転々とする。しかし、その悲惨な不法移民生活は友人のサイド・サイドのエピソードを中心に、陽気でユーモラスな調子で、カーニバル的な雰囲気語られ、判事の回想のトーンとは異なり、大きな転調が行われる。

ニューヨークのレストランでビジュは、本物の植民地時代を味わう。上階ではフランス人やアメリカ人といった裕福な植民者たちが食事を楽しみ、下の階では貧しい各国の同胞が彼らの食事を作っている。メキシコ人、インド人、パキスタン人、コロンビア人、チュニジア人、エクアドル人、ガンビア人、グアテマラ人などである。「ニューヨーク底辺のキッチンには全世界があり」(22)、植民地時代の状況が、ポストコロニアルな世界に出現している。<sup>20</sup> 脱植民地化の時代であるにもかかわらず、図式的な両勢力の対立の構図があり、旧植民地の人々の葛藤は激しい。

まず、インドからアメリカへ向かう人の流れは、大河ようになって、インドのアメリカ大使館へ押し寄せる。その表現は、ジェーン・オースティンの『自負と偏見』の有名な冒頭の文を思わせる。

この部屋には、誰もが認める事実があった。インド人は、アメリカに行くためならいかなる辱めも受けるといふ事実だ。頭に生ゴミをぶちまけられても、アメリカに入り込みたくて泣きついてくるに違いない……。(184) (下線は筆者による)

しかし、現代のグローバリゼーションの時代に、世界の中核都市へ移民として出て行く人々の旅は、自由と上昇への手段ではなく、新たな植民地的状況へとみずからを貶めるディアスポラであることが、明らかにされる。

ようやくアメリカへ渡っても移民は極貧の生活を強いられる。特に住生活と衛生・健康面の劣悪さには目を覆うものがある。日も差さないビルの谷間は、インドの自然のすがすがしさと対比され、その中でネズミが跋扈し、ネズミは一種移民という存在のメタファーとなっている。「この街じゃ何千人もの人間

が仕事を探してるんだ。取り替えるなんてすぐできる」(188)といわれる。社会の底辺で動き回った末に、ビジュは「大統領の名前さえ知らない、川の名前も知らず、旅の名所について聞いたこともない。自由の女神、ブルックリン橋も」という、観光とは全く無縁のまま帰国する。(286)

ここでは場所の転位がもたらす文化的疎外と自己像の再形成のテーマが語られる。移民たちの最大の問題は、自分の文化的アイデンティティをどう保っていくかということである。ザンジバル出身のサイド・サイドは、自己のアイデンティティに序列をつける。第一にムスリムであり、第2にザンジバル人で、第3にアメリカ人だとしている。(136)そこで彼をメンターにしているビジュも同じく、インド人のアイデンティティを守ることにするが、葛藤は依然として続く。

ここに居続けたらどうなるだろう？ハリッシュ＝ハリーのようにもうひとりの偽の自分を作り出し、それを鍵として背後の自分を理解したりするのだろうか。彼にとって、生きることはもはや生きるのではなく一死でさえも、何を意味するだろう？それはもはや本当の死とは無縁のものだった。(268)

移民生活の結果、ビジュはグローバリゼーションの世界システムをはっきりと理解することができたと感じ、愛情を注いでくれる父親のもとへ、自然美溢れる故郷へとふたたび戻ってくる。カリンボンやダージリンの産業は3T (Tea, Timber, Tourism) であるが、いぜんとして貧困にあえぐ地方である。しかも、貧乏人同志がわずかな富をめぐる争っている。ビジュはアメリカで蓄えた資金をすべて、ゴルカ解放戦線の兵士に取られてしまい、さらなる貧困にさらされる。しかし、父と子の深い愛情の交流は、判事やサイが体験することのなかったものであるといえよう。

## 6. サイとギャンの恋愛とゴルカ民族解放戦線

カリンボンのプロットの中心は、1986年のゴルカ人の反乱を背景にしたサイとギャンの初恋と破局である。1947年のイギリスからの分離独立後も、植民地時代のインドの体制の基本は変わらず、抑圧されているネパール系インド人であるゴルカ人の反乱が起こった。サイとギャンの恋は、反乱の根底にある、エリートのインド人とマイノリティのインド人との

間の差異を明らかにする。

2人の文化的違いを際立たせるのは、食事である。サイは、手づかみでは食べられない、地面に座れない、インド菓子は食べたことがない、インド流のお茶の淹れ方も知らない。言葉についていえば、サイは英語とピジンヒンディー語以外は話せないし、自分の狭い階層の外の人間とは会話できない。彼女は一目、自分がインド人らしくないことを恥じているように見えるが、インド人らしくないことは、サイの社会的地位が高いことを証明する。落下すると見せかけて、不思議なことに上昇するのだという説明がある。母国にいて異邦人であることが、社会的優位を占める条件である。

そのようなエリートの人々に対しては、当然反発がある。ヒンドゥー教徒なのに、クリスマスを祝うサイに対し、ギャンは批判の言葉を繰り返す。

「まるで奴隷だな、西洋を追いかけて。君たちがいるせいで僕たちはどこへも行けない。自分の頭で考えられない物真似人間さ。…君が真似しようとしている連中、やつらはきみなんか要らないのさ。」(163)

「君はプライドがないのか？そんなに欧米人みたいになりたいの。」(174)

独立後も残る、擬態としてのエリートの生活スタイルは、現地の人々から痛烈に揶揄されている。この小説はサイの視点から書かれているが、エリート階級に対するギャンの批判的見方もはっきりと描かれている。

ギャンはイギリスの軍隊にゴルカ兵を出してきたネパール系のインド人である。彼の家族は代々イギリス軍のために戦って来たという物語が語られる。サイの祖父は1943年にケンブリッジでまったく戦争の影のないエリートの留学生活をしてきたが、他方ギャンの曾祖父はイギリスのためにトルコで戦死し、祖父は日本と戦って、ビルマで戦死した。祖父の弟はフィレンチェで戦死し、伯父は負傷して帰ってきた。イギリスのために命がけで戦って、同じ給料、同じ待遇では決してなかったと大きな不満と怒りが残っている。インド行政府に勤めていたボースの、イギリス人と同額の年金がもらえないという不満とは、また次元が違う問題である。

ゴルカ人の青年たちは、独立後も自分たちはいまだ「正義の欠如」(157)した境遇にいると主張する。

イギリスはインドに自由を保障して去っていき、すべてのものが保護されたが、自分たちは取り残されたと感じる。最近では森は外国人の手で売られ、外国人の懐を肥やしているというグローバル資本主義の萌芽も見られる。

彼らにとって、過去の憎しみは決して終わることなく、戻ってくる。それは現在が満たされていないからである。この部分は、判事の「現在が過去を変える」という言葉が、効力を持たない領域があることを示している。その結果、ゴルカ人の若者たちは、反乱を通して「歴史を作っているという感覚、歴史が動いている」(157)と高揚感を感じる。

結局、ゴルカ民族解放戦線は和平条約に調印してカリンポンを立ち退く。しかし同時にエリート階級のインド人を中心に形成されていた、イギリスの生活様式の共同体も解体する。プーティ神父はスイスに帰国させられ、ローラとノニは財産を失う。「何世代にもわたる人々が分かち合うべき借金」(242)を返すのは、こともあろうに彼女たちだったのだ。判事は愛犬を失って精神的安定も失い、サイはギャンとの恋愛を失い、インドを出ていく決意を固める。判事の壮麗な屋敷「チョー・オユ」は遠い昔にスコットランド人が建設し、彼はそれを譲り受けて暮らしていたが、年月とともに次第に朽ち果てて、無残な姿になりつつある。判事の銃の盗難事件を捜査に来た警官たちは、「富の没落をしげしげと眺めて満足」(12)するが、これは、親英的エリート階級の衰退を象徴している。一方、ギャンとビジュがカリンポンに残るので、次第にイギリス的インド人の直接的な影響は払拭されつつあるといえるだろう。

ところで、前述のように、社会開発が専門のインド人学者カワスはカリンポン出身者として、この作品に対して次のような懸念を表明している。

- (1) カリンポンは高地にあるので、モンスーンの季節の様子は作品の描写とかなり違っている。
- (2) ゴルカ軍反乱のダイナミクスの持ついろいろな局面を理解していない。
- (3) ヒンディー語のスラングがよく用いられるが、ネパール語は出てこない。デサイは作品執筆の調査のため、2002年にカリンポンに滞在したと語っているが、わずか6週間であったという。

(1)については、モンスーンの季節とヒマラヤはたしかに関連が薄いように思われるので、これらの点に関して、インド系の研究者による批評が待たれるところである。また、言語に関しては、そもそ

も英語で書いているということ自体が、共犯的コロニアリズムであるという指摘がある。<sup>21</sup> 臨場感を与えるために、ところどころヒンディー語が使われているが、ネパール語が出てこないところは、ゴルカ人に対する作者の共感が乏しいことを表している。

## 7. 作品におけるポストコロニアリズムの諸相

作者の見解を示唆するコロニアリズムについての考え方を挙げてみると、インド人に対する人種差別政策を得々と開陳する、植民地時代のハードレスの著作に対し、サイはその子孫を捜し出して刺し殺してやりたいと激しい怒りに駆られている。(199) また、ネパール人シェルパ、テンジンについて、「(ニュージーランドの登山家) ヒラリーが(エベレストへの) 最初の一步を踏み、植民地事業のために他人の土地に旗を掲げているあいだ、荷物を持って待たされていた」と描写し、所有という行為を特権化する西洋人を批判する。「人類は山を征服すべきなのだろうか。それとも山に支配されていることを望むべきなのか。シェルパは、栄光を得ることもなければ、所有を主張することもない。山は神聖なものという人たちだっているんだ」(155) と東西の自然観の違いが示されている。

したがって、インド人とイギリス人(西洋人)という構図が描かれるときには、作品は厳しく植民地主義を批判する。しかし、インド人の中での対立、すなわち、エリートインド人とインド的インド人の抗争を描く場合には、エリート的な視点が前景化される。この作品は登場人物のそれぞれの喪失の体験を描き、ポストコロニアルなインド社会を公平に映し出そうと試みている。それは、「サイは鏡だ、周りのあらゆる矛盾を映し出している」(262) という言葉に表され、視点人物としてのサイの客観性が強調される。しかし、彼女はイギリス的インド人で、インド人共同体との接触がほとんどなく、かなり傍観者の立場である。日常生活での料理人との会話も、英語話者とヒンディー語話者のあいだの、たどたどしさがつきまとい、「複雑な語彙を必要とするようなどんなことにも立ち入らない」(19) という状況であるからだ。

彼女は結末で、カリンポンを出ていく決意を固める。イギリス式の教育を生かして世界に出て行くことができれば、女性にも名目的には機会は均等に開かれている。戦前は家父長的な支配のもと、男子青年の前にはインド人高等文官という職が開かれていた。ところが戦後は、文化帝国主義によって、女性

にもジャーナリズムでの活躍という道が開かれたのである。男性よりも女性のほうが、エキゾチックなインド女性の魅力を表現できるというオリエンタリズム的な点から、むしろ有利である。現にローラの娘はBBCで働き、セン夫人の娘はCNNで職を見つけている。ローラは娘のピクシーに常々、「遅かれ早かれ出て行ったほうがいいわ。インドは沈みゆく船よ。……扉は永久には開いていないのよ……」(47) と忠告してきた。エリート的なインド人にとっては、インドは没落していくように感じられる。ノニもサイにインドを出ていくよう忠告する。イギリス的なインド人にとっては、自らの影響力が衰えてきていることが実感されている。

アッシュクロフトのポストコロニアリズムについての著書が示唆するように、ポストコロニアル文学はもともと「対抗的なコロニアリズム」を主題とする場合が多い。しかし、この作品はイギリス的インド人の立場から描かれているので、反乱軍の非道な行為が強調され、インド的なインド人に対する読者の共感を得ることは難しい構造になっている。インドを去りゆくエリートインド人に対するノスタルジアにあふれ、ゴルカ兵の粗暴な挙動が強調されている。しかし、カリンポンに留まり、その文化的遺産を継承していく後継者は、おそらく知的なエリートであるギャンと労働者であるビジュである。そこで、この作品の立場は「共犯的コロニアリズム」の要素が強いつつも、結論的には「対抗的ポストコロニアリズム」に集約されていくといえることができる。サイ、判事、料理人という3人の声をポリフォニーに重ねた本作品の主張は、おのずから一つのイデオロギーに収束させることは困難である。その点では、結果的にポストコロニアリズムの対抗的イデオロギー性よりも、作家によって生きられた経験が強調されているといえるだろう。<sup>22</sup>

## 8. まとめ

ポストコロニアリズム文学は、植民地体験が現代のさまざまな民族の知覚や認識の枠組に及ぼした影響を表現する最も重要な方法の一つである。現代の世界は、いまだ脱植民地化の渦中にあるので、ポストコロニアリズムは今もなお歴史化することのできない進行形の思想である。<sup>23</sup> しかし、その思想は英語によって、文学的な表現を与えられるので、あくまで「西洋」の言説であるといえるだろう。

ここでは、「擬態」という概念を用いて、エリート階級の判事とサイについて論じ、判事の屈辱的な体

験の回想には、抵抗の契機が描かれていると考えた。また、「サバルタンは語るができるか」という論点から、抑圧された声の持ち主、ニミと犬を盗む女を考察した。さらに「科学の知」と「物語の知」についての見解をもとに、「物語の知」が欠けているのではないかと論じた。そして、作品には「共犯的ポストコロニアリズム」の要素が多いけれども、ポリフォニー的な構成のために、最終的には「対抗的ポストコロニアリズム」に傾いており、イデオロギー性よりも作家の体験的なコロニアリズム批判が強いという結論に達した。

『喪失の継承』は、インド社会のいろいろな階層の人々の植民地体験とその喪失感と、さらにポストコロニアルな状況を交錯させながら描いた優れた小説である。カリボン、ケンブリッジ、ニューヨークという3つの場所での3つのプロットを組み合わせ、登場人物それぞれの人々の喪失の体験をポリフォニーとして描き、インドの村の過去・現在・未来を明らかにしている。また、ガンディーが「インドは都市にではなく、村落に生きている」という言葉で表現した、村におけるインドの真の姿をうかがうことができるのもこの小説の醍醐味である。<sup>24</sup>しかし、作品の原点におかれたサイは、西洋的価値観のもとで育てられ、同年代の友人もいないという状況に置かれている。したがって、彼女の見解が必ずしも、インドの一般的な意見を本当に反映しているわけではない。しかし、ガンやビジュの声を重ねることで、「対話的な想像力」<sup>25</sup>が実現され、インドにおけるポストコロニアリズムの様相がラウンドに表現されているといえるだろう。

この事件が収束したあと、とくに2000年代のインドの経済成長には目覚ましいものがある。このような新しい時代を背景に、2008年度のブッカー賞はインド小説の*The White Tiger*が受賞した。インド系の作品が今後さらにどんな展開を見せていくか注目されるところである。

## 注

- <sup>1</sup> テキストとして、Kiran Desai, *The Inheritance of Loss* (New York: Grove Press, 2006)を使用した。以下、この本からの引用はカッコ内にページ数のみを記す。また、翻訳として、谷崎由依訳『喪失の響き』（早川書房、2008）を参考にさせていただいた。
- <sup>2</sup> 木畑 365。
- <sup>3</sup> 谷崎「訳者あとがき」500。
- <sup>4</sup> Pankaj Mishra, “Wounded by the West,” *The New York* 12 Feb. 2006, 15 Nov. 2010. <http://www.nytimes.com/2006/02/12/books/review/12misha.html>).
- <sup>5</sup> Vimal Khawas, “Kalimpong: An Inheritance of Loss!” 15 Nov. 2010. [http://jaiarjun.blogspot.com/2006/01/kiran-desai-interview\\_20.html](http://jaiarjun.blogspot.com/2006/01/kiran-desai-interview_20.html)).
- <sup>6</sup> Mishra and Hodge 276-290.
- <sup>7</sup> 松木園 4。
- <sup>8</sup> 松木園 10。
- <sup>9</sup> 松木園 11。
- <sup>10</sup> ミンハ 190 - 240.
- <sup>11</sup> 木村 i。
- <sup>12</sup> アッシュクロフト他 11。
- <sup>13</sup> 栗屋 13。
- <sup>14</sup> アッシュクロフト他 293 - 95.
- <sup>15</sup> 谷崎 作者紹介。
- <sup>16</sup> 栗屋 13。イギリスは17世紀初頭東インド会社を設立し、フランスとの間で、インドにおける覇権争いを繰り広げたが、18世紀半ばにその単独支配に成功する。それ以後、東インド会社は植民地統治機構へと変化し、インフラの整備と、司法制度や高等教育のイギリス化などによって、植民地支配の強化につとめた。それらのなかで、教育文化面の政策として重要なものは「英語教育の重要性」を説いた1835年のT・B・マコーリーによる「教育に関する覚書」（Macaulay's Minute）であり、イギリス的なインド人の育成を目指した。彼の政策は、その後のインドにおける言語文化教育に大きな影響を与え、その方向性を定めた。
- <sup>17</sup> フォスター 353 - 4。
- <sup>18</sup> Bhabha 88 - 91.
- <sup>19</sup> アッシュクロフト他 23。
- <sup>20</sup> 翻訳には、Hiroshima peopleの箇所が欠落しているが、その理由は明らかではない。
- <sup>21</sup> Mishra and Hodge 277.
- <sup>22</sup> 中井 18。
- <sup>23</sup> 中井 11。

<sup>24</sup> 松木園 2。この言葉はガンディーが発行していた機関紙『ハリジャン』(*Harijan*) 1936年8月26日号に掲載された。

<sup>25</sup> バフチン 10。

#### 参考文献

- Ashcroft, Bill, Gareth Griffiths, and Helen Tiffin. *The Empire Writes Back: Theory and Practice in Post-colonial Literature*. London: Routledge. 1989.
- Bhabha, Homi K.. *The Location of Culture*. 1994; New York: Routledge, 1998.
- Desai, Kiran (a). *The Inheritance of Loss*. New York: Grove Press, 2006.
- (b). *Hullabaloo in the Guava Orchard* . 1998; New York: Anchor Books, 1999.
- Foster, E. M. *A Passage to India*, 1924; New York: Penguin Books, 1986.
- Mishra, Vijay and Bob Hodge. “What is Post(-) colonialism?” *Colonial Discourse and Post-colonial Theory: A Reader* by Patrick Williams and Laura Chrisman. New York: Columbia University Press. 1994.
- アッシュクロフト、ビル他。『ポストコロニアルの文学』木村茂雄訳。青土社。1998年。
- スピヴァック、ガヤトリ。『サバルタンは語る事ができるか』上村忠男訳。みすず書房。1998年。
- バフチン、ミハイル。『ドストエフスキーの詩学』望月哲男・鈴木淳一訳。筑摩書房。1995年。
- フォスター、E. M.. 『インドへの道』瀬尾裕訳。筑摩書房。1994年。
- ミンハ、トリン。『女性・ネイティブ・他者－ポストコロニアリズムとフェミニズム』竹村和子訳。岩波書店。1995年。
- 栗屋利江。『イギリス支配とインド社会』山川出版社。1998年。
- 木畑洋一編著。『イギリス帝国と20世紀 第5巻－現代世界とイギリス帝国』ミネルヴァ書房。2007年。
- 木村茂雄編。『ポストコロニアル文学の現在』晃洋書房。2004年。
- 中井亜佐子。『他者の自伝』岩波書店。2007年。
- 松木園久子。『英語小説にみる「村」のなかのインド』大阪大学出版会。2008年。